

2019年5月

「コリーグ」52号 目次

巻頭言（1～2）センター長就任のご挨拶（3）平成30年度 全国大学教育研究センター等協議会を主催して（4）International Doctoral Education Research Network (IDERN) / The 6th International Academic Identities Conference (IAIC 2018) 開催報告（5～6）平成30年度 国立大学附置研究所・センター会議（7）第46回研究員集会報告（8）平成30年度高等教育公開セミナー報告（9）大学職員のための（I）Rゼミナール 開催報告（10）国際会議『知識社会における大学教授職（APIKS: Academic Profession in the Knowledge Society）』報告（11）2018年度の公開研究会（12～13）センター往来【2018年4月～2019年3月】（14）新任者・離任者・就職者から一言（15～19）情報調査室だより（20）

巻頭言



The Importance of a Comparative Perspective

William K. Cummings

(Professor Emeritus George Washington University)

Colleague is the annual newsletter of RIHE, Japan's largest research institution focusing on issues of higher education and research. RIHE was founded in 1972 at the peak of the "third major revolution" in Japanese higher education. At that time, a concern was raised: would this new institution focus on local issues such as the provision of dormitories or on issues of national and international significance.

RIHE's leaders, despite the shortage of funds, decided not to be paralyzed by this false dilemma. From the very beginning they pursued a robust multi-disciplinary agenda. Some studies were local, others national or international. Some focused on a narrow set of issues while others were more comprehensive. Some focused on the humanities, others on problems particular to STEM fields. Thanks to this eclectic approach RIHE has grown from a modest sized institution with only four academic staff to a large institution with nine academic staff and six support staff.

RIHE is known for the high quality of its research and service. Thus it is recognized as one of Japan's top research institutes and attracts leading researchers from around the world extending its warm welcome to all who come. RIHE has several Visiting Scholar opportunities ranging from short-term to long-term and from

No. **52**

visiting scholars to support of graduate students (both Japanese and international). If you have an interest in any of these topics, feel free to get in touch. Additionally RIHE has placed an impressive emphasis on research tools so that today it has possibly the world's largest collection of books and journals on higher education.

While much of RIHE's work uses the English language, **Colleague** now- in its 44th year of publication is in Japanese, placing a barrier on access. This past year the RIHE faculty decided to increase the visibility of their research work by shifting the language of the preface of **Colleague** to English. And I was invited to offer some suggestions for future work. This is an interesting honor/request, but also very difficult as the suggestions offered by me may not reflect the interests of other colleagues. Recognizing this possibility here are my thoughts:

Student engagement--Perhaps the biggest challenge for higher education around the world is the tendency of youth to think of their student days as a time for relaxation and for building new friendships and not a time for skill development that will fit the emerging global economy--this tendency for students to minimize skill development may be more evident in Japan than in other countries, but even so it is widespread.

Student achievement--In the first two decades of the 21st century perhaps the most trendy research focus was on high school students and the effort they devoted towards performing well in high stakes tests. A challenging recent development is the effort to develop tests of the level of learning of college and university tests that would be valid across nations. These efforts are still in the earliest stages of concept and instrument development.

Student program completion--- Despite the relaxed attitude to their collegiate studies, the Japanese completion rate of Japanese college students is exceptionally high. What is behind this contradiction? And what can be learned through comparative research.

Faculty engagement--Universities look to the individual faculty for the planning of teaching and research activities. With the rise of the Global economy, there is increasing pressure to prepare the next cohort. Most faculty accept this responsibility, but only a minority are willing to devote extensive time to curriculum development. A recent survey indicated the lukewarm commitment of the faculty in most countries. Moreover notable is the decline in interest over the last twenty years. So as the need for faculty engagement goes up, faculty involvement declines. This is a dangerous gap.

The components of the academic role--Faculty role is generally said to consist of four components: teaching, research, internal service, external service. There is much variation across countries. For example, in Japan we see a strong emphasis on research, and relatively little interest in the other components. It appears that the Japanese graduate school has a singular emphasis on training the next generation of university based researchers. Yet the majority of available jobs will be in corporate and government laboratories. Is it possible, given recent changes in the economy, that the orientations of more graduate students values could be changed towards a more entrepreneurial direction.

So there are many possibilities for enhancing the comparative dimension of academic research. As RIHE moves forward, I hope it will encourage new comparative perspectives on the policy issues confronting contemporary higher education.

センター長就任のご挨拶

小林 信一

(広島大学高等教育研究開発センター長／特任教授)

2018年10月に、山本陽介前センター長の後任として、高等教育研究開発センター長に就任いたしました。よろしくお願ひ致します。

私は約1年半前に身体障害者に認定され、車椅子で生活しています。障害者差別解消法が施行されて3年が経過し、大学でも「合理的配慮」という言葉が普通に使われるようになってきました。また、最近では日本社会でもダイバーシティが意識されるようになり、障害者のみならず、性別その他の多様性が価値あるものになりつつあります。知の拠点たる大学にとっても多様性は財産です。多様性は高等教育研究の課題でもあるので、当事者の体験を通じて気づいたこと、考えたことを書いて挨拶に代えさせていただきます。

私は、封入体筋炎という病気になりました。筋肉を使いすぎると筋肉組織がなくなっていく病気です。普通なら筋トレで体力低下を防ごうとしますが、それらはすべて裏目に出ます。原因も治療法もわからない進行性の難病ですが、進行はたいへん緩やかです。勘違いして筋トレなどをすると、急速に症状が悪化することもあります。私の場合すでに、歩くことはできませんし、握力が低下し、また手の指先の力もかなり弱っています。それでも、気をつけて生活していれば比較的長く生きられると言われていいます。

入院検査で病名が確定すると、生活は大きく変わりました。3ヶ月の入院生活も経験しました。入院しても、服用する薬の副作用に四苦八苦する以外は、とくにやることもないのですが、しだいに、このまま歩けなくなるのだろうか、家の中に籠る生活になるのだろうか、寝たきりになるのだろうか、家の中に籠って何をして毎日を過ごすのか、どのように生活費を確保するのか、と嫌なイメージが頭をよぎるようになりました。

たまたま、(国立国会図書館で働いていた時には接触が困難だった)新聞、雑誌、TVの記者が数年ぶりに会いたいと言ってくれたので、入院のあいまに近所のカフェや病院の面会室で会うこともありました。また、原稿を書いてみないかと誘われたこともあり、入院中に頭痛に悩まされながら、原稿を書いていました。また、退院後には、講演その他の依頼が少しずつありました。病気の私に声をかけてくれる人が何人もいたことは幸いでした。

妻に車椅子を押ししてもらいながらですが、少しずつ外出するようになりました。その後、中古の簡易電動車椅子を自費で購入し、移動できる範囲も広がりました。次第に体調がよくなってきたこともあり、出かけ先の皆さんに多大の配慮をいただきながら、各種の会議、研究会等にも出席するようになりました。結果的には、多くの皆さんに引っ張り出されて、家に籠る生活にはなりませんでした。

障害者として、さまざまな公的支援を受けています。今は、自分ができることを通じて社会に恩返しすることが責務だと思っています。納税すること、健康保険料を納付することで、自分に対する公的支援の原資を少しでも補い、多くの方に必要な支援が届くようにすることもその一つです。さらに、大学教員、研究者として、社会へ恩返しすること、とくに若い世代を励ましていくことが、私に残された身体能力の中でなすべきことだと感じています。障害者は社会のお荷物だと後ろめたさを感じつつ、ひっそりと生活するのではなく、使える能力を活かすことで、社会全体も活性化し、障害者支援の経費も実質的には減らせる可能性があります。周りの人々のほんの少しずつの配慮がそれを支えてくれます。

このような生活を経験して実感できたことがあります。社会の中には、家の中に籠る、社会に出ないという選択をした人、選択をせざるを得なかった人は少なくないはずで、とくに出産・育児で仕事を離れている女性がそうです。外国人や退職者も似ています。自分もそうした人たちと同じなのだと気づきました。いずれも、最近では仕事をすることが可能になってきています。しかし、そのような人たちが

本当に能力を発揮するためには、まず、社会や職場が彼ら彼女らを「引っ張り出す」ことが必要です（外国人スタッフには、とにかく来てもらわなければなりません）。絶対に社会復帰する、という意思の強い人はいいのです。私がそうであったように、家に籠るしかないと諦めたり、迷ったりしている人が少なくないだろうと思います。初めての経験で将来の見通しが立たないために迷っている人を「引っ張り出す」ことが肝心です。

第二に必要なことが合理的配慮です。働く意思が強い人でも、個性や個人的事情があります。周囲の理解とほんの少しの配慮で解決できることはたくさんあります。しかし、障害者にとって現実の世界は



バリアだらけなのと同様に、育児をしている母親はもちろん、外国人スタッフにも高齢者にも、ハード面、ソフト面のバリアが多々あります。そうしたバリアは感じない人にはその存在すらわからないものです。また、無理のない柔軟な働き方も必要です。皆で協力して一つ一つ解決していく必要があります。こうして埋もれてしまいそうな能力を引き出せば、多様性は大学の財産になるでしょう。

このように、障害者になって、ダイバーシティをリアルな問題として感じるできるようになりました。さて、高齢者の中にも元気な方がいらっしゃいます。社会への恩返しをしたいと行動する人も少なくありませんが、やはり迷っている方たちもいます。世阿弥の言うように「麒麟も老いては驚馬に劣る」とはいえ「真に得たらん能者ならば、物数はみなみな失せて、善悪見所はすくなしとも、花は残るべし。」老人支配はいただけませんが、現役時代とは違う仕方では輝くことを期待したいところです。

平成30年度 全国大学教育研究センター等協議会を主催して

大膳 司

(高等教育研究開発センター副センター長／教授)

平成30年9月10日（月）・11日（火）に、30校の国立大学から52名が集まって、広島大学東広島キャンパス内学士会館2Fレセプションホールや会議室を使って全国大学教育研究センター等協議会を主催した。

初日は、「学士課程教育の質を保証する学習支援のあり方を考える」をテーマとして開催した。まず、谷川 裕稔（四国大学短期大学部学修支援センター長、日本リメディアル教育学会長）から「学士課程教育における学習支援 - その歴史・現状・課題」のテーマで講演を頂き、その後、北海道大学、山梨大学、名古屋大学、愛媛大学から各校の学士課程教育の質を保証する学習支援の実践事例について話を頂いた。

初日の夕方は、本学内マーメイドカフェで参加者40名が集まって親交を深めた。

2日目は、「教職協働」「学修ポートフォリオ」「学修成果のアセスメント」「教養教育の今後の在り方」「到達目標達成型教育プログラム」「文理融合教育」の6テーマに分かれて、各大学の活動情報を共有した。

各国立大学は自身の理念に基づいて、様々に工夫した教育活動を実施している。その活動の中心にいる大学教育センター教員は、このような会合を通して情報交換に努め、更なる工夫を促進している。本センターは事務局として、このような集まりを支援していきたい。



International Doctoral Education Research Network (IDERN) The 6th International Academic Identities Conference (IAIC 2018) 開催報告

佐藤 万知

(広島大学高等教育研究開発センター准教授)

2018年9月17日から21日にかけて、International Doctoral Education Research Network, IDERN, の研究交流会と The 6th International Academic Identities Conference 2018を開催した。IDERN の研究交流会は、大学院教育や大学院生を研究対象とした研究者が集まり、共通した研究課題に関するディスカッション、最新の研究課題や理論、手法の共有、ネットワーキングをすることを目的としている。これまで3年おきに開催されており、今回は各国から約50名が参加をし、2日間にわたり、活発な意見交換を行った。話題提供として日本の大学院問題について、小林信一（現高等教育研究開発センター長）より講演があった。多くの参加者にとって、非英語圏の大学院教育事情について体系的な話を聞くことはあまりなく、新しい視点を持つ貴重な機会となった。

IDERN に続き、19日から3日間に渡り、IAIC 2018が開催された。IAIC は2年おきに開催されているアカデミック・アイデンティティという視点で大学教員問題や大学院教育、大学のあり方などを議論する国際学会で、これまで、イギリス、オーストラリア、ニュージーランドで開催されてきた。今回初めて、非欧米圏である広島という場で開催することもあり、The Peaceful University: aspirations for academic futures - compassion, generosity, imagination, and creation- をテーマとして発表者の募集を

行った。結果、99名が参加し、その内77名は海外からの参加で、とても国際色豊かな会であった。基調講演には、広島大学羽田貴史名誉教授、シンガポール国立大学 Swee Lin Ho 博士、ブリストル大学 Bruce Macfarlane 教授を迎え、日本における大学教授職研究の動向とアイデンティティ議論の不在、シンガポール、日本、韓国における高等教育政策のトレンドと教員の日常的活動における影響、学生の学問の自由に関して、話題が提供された。参加者による発表テーマは、大学院生のアカデミック・アイデンティティ形成、大学教員の専門性、高等教育政策の影響、大学の目的など、理論的なものから実践的な内容まで多岐にわたった。

また今回は学術的な場である学会と一般的な人々が経済活動をし、暮らす場である地域を融合させる試みとしてアカデミック・マルシェを開催した。学会会場に設置されたブースに9店舗が出店し、東広島の有機農家による野菜販売やインドの子供達の教育を支援する学生団体によるインドの紅茶などの販売、西条の酒粕を使ったかりんとうなどが販売された。学会参加者は、学会会場にしながら、地域の人々と触れる機会が得られたことを高く評価しており、アカデミック・マルシェに通りがかった学内関係者は、学会の敷居が低くなったと評価していた。

最後に、これらのイベントが成功したのは、IDERN および IAIC の運営委員会、高等教育研究開発センター事務室、個人的に協力をしてくださった教職員のみなさまの多大なるご支援のおかげです。ここに深く感謝の意を表します。



平成30年度 国立大学附置研究所・センター会議

第3部会シンポジウムについて

小林 信一

(広島大学高等教育研究開発センター長／特任教授)

高等教育研究開発センター（RIHE）は、平成30年度に国立大学附置研究所・センター会議（附置研・センター会議）第3部会（人文・社会科学系）の部会長を務めました。そこで、同部会の定例シンポジウムを平成30年10月12日午後、広島市内ホテルグランヴィア広島で開催いたしました。テーマは「大学・研究者の研究環境と研究評価ー人文・社会科学の望ましい発展のためにー」です。

附置研・センター会議は、国立大学に設置された附置研究所や学内共同利用研究センター等の連絡会です。国立大学法人化後に、附置研・センターに対する予算は次第に削減されてきました。一方、法人化後の大学は、従来の附置研・センターとは別に、大学の強みを生かして戦略的に新しい分野の研究センターを設置し、大型の外部資金を活用することでそれを運営するという方式で研究センターを設置、運営することが可能になりました。その初期段階に関しては文科省や日本学術振興会が研究拠点の形成支援のための資金を選択的に提供することも行われています。

附置研・センターはその存続のために、学内で新興勢力と競わなければならないだけでなく、往時に比べて極端に細った附置研・センターへの資金的支援を獲得するために、附置研・センター同士でも競わなければならないようになりました。とくに、学内での新たな競争の構図は、多くの場合、学問分野間競争の様相を呈することになります。競争は、研究成果の多寡や、研究資金の獲得可能性などの研究評価を通じて行われます。これが、シンポジウムの背景にある課題です。

シンポジウムでは、附置研センター会議の第3部のメンバー機関であり、かつ全体の会長でもある京都大学経済研究所所長の溝端佐登史氏から「人文・社会科学研究者の研究環境と研究評価の現状と課題ー経済学者の立場からー」、RIHEの客員教授でもある羽田貴史氏から「日本の高等教育政策と研究環境・研究評価」と題して基調講演をしていただきました。溝端氏は同じ人文・社会科学分野でも、詳細にみると、研究論文の出版パターンは多様であり、経済学は教育研究の国際化が進んでおり、国際的な論文データベースに採録されるような論文が少なくないこと、その結果、自然科学分野のような評価が可能になっていることを示しました。羽田氏は国立大学法人化に関する議論の始まりから、大学の置かれていた歴史を、政治的背景を含めて振り返ることを通じて、今日の国立大学と人文・社会科学が置かれている状況、研究評価が政策的課題として登場する経緯などについて解説しました。お二人の講演、及び多数の参加者に感謝申し上げます。



第46回研究員集会報告

大膳 司

(高等教育研究開発センター副センター長／教授)

平成30年10月12日（金）「大学・研究者の研究環境と研究評価－人文・社会科学の望ましい発展のために－」をテーマに、広島駅近くのホテルグランヴィアで研究員集会を開催した。

研究者を取り巻く環境は年々厳しくなっている。特に、人文・社会科学系研究者の置かれた環境は厳しく、一部大学では、世界レベルの大学ランキング向上が念頭に置かれた、理系型の評価体系が強要される中で、人文・社会科学系学部不要論といった極端な議論まで噴出している状態である。人文・社会科学が構築してきた専門知を本当に知り尽くした上で、それでも人文・社会科学系学問は不要と言いきることができるのであろうか。このような疑問に敢えて目をつぶってきたのが現在の大学の姿であり、今一度あらためて検証が求められていると言えるのではないか。

こうした問題関心のもと、今年度の研究員集会では、「大学・研究者の研究環境と研究評価－人文・社会科学の望ましい発展のために－」と題し、第1部では、国立大学附置研究所・センター会議会長であり、京都大学経済研究所所長の溝端佐登史先生に、人文・社会科学の研究環境や研究評価の現状・問題点について専門の経済学の観点からのご講演をいただいた。併せて、広く高等教育政策の歴史的展開のレビューをもとに、現状の日本の高等教育のあり方の問題提起をしていただくために、広島大学高等教育研究開発センター客員教授であり、東北大学名誉教授・広島大学名誉教授の羽田貴史先生にご登壇をいただいた。このお二人のご講演を元に、科学技術政策論を核に鋭い議論を展開してきた当センター特任教授の小林信一先生に、会場での議論を舵取りしていただいた。第2部では、「研究評価とは何か－その課題と展望－」と題して山崎茂明先生（愛知淑徳大学名誉教授）から、「研究は競争で改善するか」と題して山口裕之先生（徳島大学大学院社会産業理工学研究部教授）から、「最新のデータによる研究者の研究環境・評価の状況」と題して、大膳司（広島大学高等教育研究開発センター教授）から、追加の情報を提供して、本テーマを深めていった。

なお、研究員集会の詳細は本センター編の2018年度研究員集会報告書をご覧ください。



平成30年度高等教育公開セミナー報告

村澤 昌崇

(高等教育研究開発センター副センター長／准教授)

今年度は8月29日（水）13:30～18:00の半日の日程にて、「学生調査とその活用－研究大学型学生調査と民間提案型プログラム」というテーマ設定の元で開催いたしました。

今回の公開セミナーは、今年度の西日本大雨災害の影響を考慮し、急遽開催日時の変更・短縮をしての対応となりました。災害により被害に遭われた方々には、この場を借りて哀悼の意を表します。

今回は、4つの大学の事例報告を行ってもらった。最初に、「大阪大学における教育アセスメント」と題して、安部有紀子先生、和嶋雄一郎先生に、UC パークレーを中核に展開されている SERU (Student Experience in the Research University) 調査および大阪大学独自の学生調査の実態が紹介されました。次に、「広島大学と SERU 調査: データの有効活用への取組」と題して、村澤昌崇により、大量の未回答・欠損を含んだデータを有効に活用するための、学生の在籍情報を活用した欠損値補完による分析を紹介いたしました。

休憩を挟んでの後半部では、「東北大学における学修成果調査」と題して、串本剛先生、および「勇気ある知識人を育てる－教育の質保証との一体的入学者選抜改革の推進－」と題して丸山和昭先生により、旧帝国大学系ならでの、学生調査の実態と課題が紹介されました。トリアは、「PROG の意義と実践事例および課題」と題して、河合塾の野吾教行氏より、近年関心が高まっている「リテラシーテスト」と「コンピテンシーテスト」のコンビネーションで展開されるジェネリックスキルの測定と課題について、報告がなされました。

以上の報告内容をご覧いただければわかるように、IR の必要性が高まるなかで、米国型、独自型、業者型の各種調査が同時並行で展開されており、いずれも独自の特徴をもつ興味深い内容となっていました。条件さえ満たせば、各大学において、これら調査が相互補完的に活用されることにより、学生の多様な側面が測定可能になるという期待を抱かせるものでした。併せて、回収率の低さや欠損の多発、業者が主導するテストへの抵抗感、分析の専門家の未充足などの問題も抱えており、EBPM が声高に叫ばれる中で、データを用いた因果推論をどこまで精度高く進めることができるのか、という課題にも気付かされた会合でした。



大学職員のための (I)R セミナール 開催報告

村澤 昌崇

(高等教育研究開発センター副センター長／准教授)

今年度は、センターの高等教育研究の蓄積をより積極的に大学を中心とした現場に還元することを目的として、大学 IR のための研修プログラムの提供を試行的に開始しました。

本研修の内容は、今日の大学運営に必須となっている大学 IR に役立つと思われるような、統計分析の基礎中の基礎を、フリーソフト（無料）を用いてより実践的に身に付けてもらうことが狙いです。しかもそれを半日でお手軽に体験することができる点に特徴があります。大学における IR の要諦は、データを用いた分析にあると思われませんが、これが大学関係者にとっての高いハードルにもなっており、IR 室を設置したけど開店休業状態にある大学もあるようです。そこで、そうした「敷居の高さ」を取り除き、誰でも IR を通じた大学のデータ分析に近づくことができるような内容にするよう、務めております。

今年度は、9月に東京田町の廣大オフィス、11月に大阪中之島、そして1月には広大東千田キャンパスにて、定員を30人程度に設定して当センターのサイトから募集をさせていただきましたところ、いずれも募集開始からすぐに定員が埋まりました。直前に、募集を開始したにも関わらず多くの方に参加していただき、ありがとうございます。

実際の研修では、2部構成として、第1部では、IR に使えそうな操作がとても簡単なフリーソフト (Exploratory, Jamovi) の紹介と運用の事例を皆様と共有させていただきました。第二部では、中級者を意識して、フリーソフトの R およびその GUI の一つである RStudio をご紹介し、柔軟なデータハンドリングと、ビッグデータ分析の一例などを紹介させていただきました。

ご参加いただいた方々からは、貴重なご意見を頂戴いたしました。この場を借りて御礼申し上げます。今後頂戴した意見も反映させながら、内容をブラッシュアップさせていこうと存じております。

今後も各種データの“可視化”を通じた、平易な IR を、有志の皆様と共同で楽しく盛り上げていきたいと存じております。ご賛同いただける方は、是非ともご協力のほど、よろしくお願いいたします。



国際会議『知識社会における大学教授職 (APIKS: Academic Profession in the Knowledge Society)』報告

黄 福涛

(高等教育研究開発センター教授)

この研究プロジェクトは2007/2008年に実施した「大学教授職の変容に関する調査研究 (CAP: Changing Academic Profession)」の追跡調査としてスタートしたもので、特に自然科学のSTEM分野(科学, テクノロジー, 工学, 数学)に焦点をあてた大学教授職の国際比較を目的としています。世界30カ国以上の研究チームがこのプロジェクトに参加しており, 調査手法などに関する4回のワークショップを経て(2014: フィンランド, 2015: ブラジル, 2016: 韓国, 2017: 日本), これまで21カ国で共通の質問票を用いた調査が実施されています。

今回の会議は3つの基調講演および各国研究チームによる調査結果の報告を中心に構成され, 欧州, 北米, 南米, アジアの20カ国・地域から約60名(うち外国から50名)の研究者が出席しました。基調講演では, 兵庫大学の有本章教授(演題「大学教授職のR(研究)-T(教育)-S(学習)」[An International and Comparative Perspective of the Academic Profession's R-T-S nexus]), ドイツ・カッセル大学のタイヒラー教授(演題「知識基盤社会: 研究と教育の有機的連携を損なう力になるか?」[The Knowledge Society: A force undermining fruitful links between research and teaching?]), そして米国ジョージワシントン大学のカミングス名誉教授(演題「知識アカデミーのための知識: 若干の小理論」[Knowledge for the Knowledge Academy: Several mini-theories])が登壇し, 同分野の過去の研究実績に基づく視座や国際調査における課題を提示しました。また, 20ヶ国・地域の研究チームによる調査結果の報告では, 大学教授職の“教育”と“研究”に対する意識や2つの職務の関係性について, 専門分野, 職位, 年齢など多様な側面からの分析に基づいた各国の特性が報告されました。各研究チームの発表後には, 分析手法の妥当性や各国独自の社会的・政治的背景に沿った大学教授職の役割や教育・研究活動の関係性などについて質問が相次ぎ, 活発な議論が展開されました。最後に, 今回の研究成果に基づく学術出版, 国際的データベースの構築, 国際共同研究の連携などプロジェクトの今後の発展の方向性について意見が交わされ, 会議は2日間の日程を終了しました。



2018年度の公開研究会

* 肩書は当時のもの

	講 師／ファシリテーター	テ ー マ
第 1 回 (2018/5/14)	田中 久貴 (東洋経済新報社 データ事業局・データベース営業部) 速水 幹也 (私立大学職員) 松宮 慎治 (広島大学大学院教育学研究科博士課程後期) 中尾 走 (広島大学大学院教育学研究科博士課程後期) 村澤 昌崇 (広島大学高等教育研究開発センター准教授) 庵木 孝公 (三菱 UFJ 銀行 法人業務部 医療・学校法人グループ上席調査役) 小林 信一 (元国立国会図書館専門調査員) 水田 健輔 (大正大学教授) 両角亜希子 (東京大学准教授) 山本 清 (東京大学客員教授)	大学の「可視化」「数値化」再考： 東洋経済新報社『大学四季報』を 活用した大学組織行動の分析
第 2 回 (2018/6/14)	有本 章 (兵庫大学教授) 大膳 司 (広島大学高等教育研究開発センター教授) 黄 福涛 (広島大学高等教育研究開発センター教授) 金 善良 (広島大学高等教育研究開発センター講師) Jung Cheol Shin (ソウル大学教授) Heejin Lim (ソウル大学研究員) Haeju Jung (ソウル大学博士学生) Robin Jung-Cheng Chen (国立政治大学教授) Sophia Shi-Huei Ho (台北市立大学教授) Michael Yao-Ping Peng (玄奘大学助教)	東アジアにおける博士課程教育の 比較研究
第 3 回 (2018/6/26)	Hugo Horta (香港大学助教授)	博士課程学生のキャリア志向に関 連する自己認識の視点から、スキ ル重視の政策について学ぶこと： アジアの3つのフラッグシップ大 学のケース
第 4 回 (2018/11/8)	Roger L. Geiger (ペンシルバニア州立大学名誉卓越教授)	アメリカの大学における研究組織 -その論理・構造・発展
第 5 回 (2018/12/14)	Thomas Brotherhood (オックスフォード大学グローバル高等教育センター大学 院課程後期／広島大学高等教育研究開発センター日本学 術振興会外国人特別研究員)	日英における留学生と移民者の関 係についてインタビュー調査を 中心に-
第 6 回 (2019/1/11)	Jisun Jung (香港大学准教授) Jason Cheng-Cheng Yang (国立嘉義大学教授) Sheng-Ju Chan (国立中正大学助教) Wenqin Shen (北京大学准教授) Soo Jeung Lee (世宗大学校助教) SeungJung Kim (ソウル大学校研究員) Sae Shimauchi (首都大学東京准教授) Yangson Kim (広島大学高等教育研究開発センター講師)	東アジアの修士課程教育：アクセ ス, 学習, 雇用について

	講 師／ファシリテーター	テ ー マ
第7回 (2019/1/25)	佐藤 万知 (広島大学高等教育研究開発センター准教授) 金 良善 (広島大学高等教育研究開発センター講師) 坂無 淳 (福岡県立大学人間社会学部講師) 藤原 綾乃 (文部科学省科学技術・学術政策研究所主任研究官) 黒澤 泰 (茨城キリスト教大学生生活科学部心理福祉学科講師)	日本の大学における女性教員のキャリア：現状と課題を多角的に考察する
第8回 (2019/1/31)	白川 展之 (文部科学省科学技術・学術政策研究所主任研究官)	根拠に基づく政策におけるエビデンスとは何か：国際的動向と日本の現実
第9回 (2019/2/1)	胡 永紅 (中国厦門華厦学院准教授) 羅 先鋒 教授 (中国厦門華厦学院教授／高等教育研究センター副センター長) 申 樹群 (中国広東南方医科大学講師)	中国の高等教育：入試、新たな制度、経営と人的資本の開発について
第10回 (2019/2/22)	戸田 千速 (東京大学大学院教育学研究科博士課程) 塚田亜弥子 (東京大学大学院教育学研究科博士課程)	シンガポールにおける外国大学分校に関する考察 留学生受入拡大過程における政策と大学の留学生受入体制－日韓比較による考察
第11回 (2019/2/26)	遠藤 健 (早稲田大学 大学総合研究センター 助手)	大卒後の地域移動と労働市場の関係の検証－時系列的変化に着目して
第12回 (2019/3/6)	有本 章 (兵庫大学教授) 大膳 司 (広島大学高等教育研究開発センター教授) 黄 福涛 (広島大学高等教育研究開発センター教授) 金 善良 (広島大学高等教育研究開発センター講師) Jung Cheol Shin (ソウル大学教授) Robin Jung-Cheng Chen (国立政治大学教授) Sophia Shi-Huei Ho (台北市立大学教授) Michael Yao-Ping Peng (西安建築科技大学准教授)	東アジアにおける博士課程教育の比較研究 (2)
第13回 (2019/3/19)	牧原 出 (東京大学先端科学技術研究センター教授) 村上 祐介 (東京大学教育学研究科准教授) 羽田 貴史 (広島大学・東北大学名誉教授)	高等教育研究プラットフォームセミナー政策決定過程の変容と高等教育
第14回 (2019/3/27)	辰井 聡子 (立教大学教授)	法科大学院はなぜ成功しなかったのか

センター往来【2018年4月～2019年3月】

*所属は当時のもの（敬称略）

<2018年>

4月 なし

5月 なし

6月 Marine Cazeneuve（リセ・オゼン）Jung Cheol Shin, Heejin Lim, Haeju Jung（ソウル大学）
Robin Jung-Cheng Chen（国立政治大学）Sophia Shi-Huei Ho（台北市立大学）Michael Yao-Ping
Peng（玄奘大学）有本 章（兵庫大学）Hugo Horta（香港大学）

7月 なし

8月 安部 有紀子, 和嶋 雄一郎（大阪大学）串本 剛（東北大学）丸山 和昭（名古屋大学）
野吾 教行（河合塾）

9月 John Ross（Times Higher Education）

10月 なし

11月 Roger L. Geiger（ペンシルバニア州立大学名誉卓越教授）

12月 Jisun Jung（香港大学）, Jason Cheng-Cheng Yang（国立嘉義大学）, Sheng-Ju Chan（国立中正
大学）, Wenqin Shen（北京大学）, Lingyu Liu（北京大学）, Soo Jeung Lee（世宗大学校）,
Jisun Jung（香港大学）, SeungJung Kim（ソウル大学校）, Sae Shimauchi（首都大学東京）

<2019年>

1月 Jisun Jung（香港大学）, Jason Cheng-Cheng Yang（国立嘉義大学）, Sheng-Ju Chan（国立中正
大学）, Wenqin Shen（北京大学）, Soo Jeung Lee（世宗大学校）, SeungJung Kim（ソウル大学校）,
Sae Shimauchi（首都大学東京）, 坂無 淳（福岡県立大学）, 藤原 綾乃（文部科学省）, 黒澤 泰
（茨城キリスト教大学）, 白川 展之（文部科学省）

2月 胡 永紅, 羅 先鋒（中国厦門華厦学院）申 樹群（中国広東南方医科大学）戸田 千速, 塚田
亜弥子（東京大学）遠藤 健（早稲田大学）

3月 有本 章（兵庫大学）, Jung Cheol Shin（ソウル大学）, Robin Jung-Cheng Chen（国立政治大学）,
Sophia Shi-Huei Ho（台北市立大学）, Michael Yao-Ping Peng（西安建築科技大学）, 辰井 聡子
（立教大学）

新任者・離任者・就職者から一言

2019年度客員研究員



荒井 克弘(あらい かつひろ)

東北大学名誉教授/大学入試センター名誉教授

平成5年から3年半、当時の広島大学・大学教育研究センターにお世話になりました。統合移転の時期に重なり、短い在籍期間にもかかわらず、引越ばかりしていたという記憶があります。はじめの2年は東千田町で、残り1年半は西条キャンパスでした。当時は、キャンパスの周りはマーケットもなく、ががら山の宿舎の周りは夜になるとほんとうに暗くて、暗さに驚くというほどでした。研究では皆さんの協力を得て、共同研究「大学のリメディアル教育」を起案してそれに専念しました。学生の学力不足が深刻化する少し前のことで、それが広島での仕事になりました。縁あって、またお世話になります。センターの資料を拝見すること、旧い友人たちに会えることを楽しみにしています。



伊神 正貫(いがみ まさつら)

科学技術・学術政策研究所 科学技術・学術基盤調査研究室長

この度は客員研究員の機会をいただき、誠にありがとうございます。伝統ある貴センターに参加することとなり、大変嬉しく思います。

私は、科学技術イノベーションの観点から、各種指標の開発、科学技術システムの定点観測、科学における知識創出プロセスの分析、科学研究のマッピングなどを行ってきました。これらの理解が進むにつれ、知識生産における高等教育機関の重要性、高等教育機関の活動を測ることの難しさを感じています。今回頂戴した機会を有意義に活用し、貴センターにおける研究の蓄積から学びつつ、貴センターの活動に微力ですが貢献できればと考えております。どうぞよろしく願いいたします。



坂無 淳(さかなし じゅん)

福岡県立大学 人間社会学部・講師

客員研究員を委嘱いただき、誠にありがとうございます。以前大学院生だった時は遠く北海道大学の図書館で広島大学の先生方の研究を探して参考にさせていただいたり、別の機会にはHPから高等教育統計データ集を使用させていただいたこともあります。「利用者」であった私が客員研究員になれるということを大変うれしく思います。現在は「高等教育におけるジェンダー・バランスの不均衡とその是正に関する実証研究」というテーマで、研究者のキャリア形成や大学の男女共同参画などについて研究を行っています。これまで山形大学、立教大学、現職の福岡県立大学と、設置者も地域も様々な大学で働いてきました。広島に近くなったこともあり、これから皆様と交流させていただければ幸いです。どうぞよろしく願いいたします



嶋内 佐絵(しまうち さえ)

首都大学東京 国際センター・准教授

客員研究員を拝命し、とても光栄に思っております。私は高等教育の国際化研究を行っており、東アジア地域を中心とした留学生移動と留学動機の変容、内なる国際化、英語による教育プログラムとそのインパクトに関心を持っています。日本、韓国、オランダが主なフィールドです。最近では、学士課程教育における学際化と国際化の理念と教育実践に関心があり、その「学際」・「国際」性が各国・各大学のコンテキストでどのように解釈され実践されているのか、その多様性に関する研究をしています。首都大学東京では、国際副専攻の日本人学生や留学生を対象に、国際比較高等教育論や異文化コミュニケーション、国際交流概論などを英語で開講し、内なる国際化とは何か？を日々模索しているところです。RIHEでの活動を通して、多くの研究者の方々と議論ができる機会を持つことを、とても楽しみにしています。



辰井 聡子 (たつい さとこ)
元立教大学 法務研究科・教授

これまでいくつかの大学の法学部、法科大学院で講義を持ち、また先端科学技術の規制について研究していた関係で、医学系を中心とした理系の学問分野とも多く接点を持ちました。その過程で、専門家の社会的責任といただきますか、一般社会人としての感受性や倫理観を保ち、社会と関わりを持ちながら専門家として行動できる人材育成の重要性を強く感じるようになりました。客員研究員として、お招きいただいたこの貴重な機会に、皆さまと刺激を与えあいながら、こうした問題意識を追究していければと考えております。どうかお気軽に声をおかけ下さい。



船守 美穂 (ふなもり みほ)
国立情報学研究所 情報社会相関研究系・准教授

このたびは、高等教育研究の世界でも有数のメッカであるRIHEの一員に迎え入れて頂き、光栄です。自分も高等教育研究業界に認められるようになったと感慨深いものがあります。

私はもともと地球物理です。民間シンクタンク、文科省途上国協力の部署、政研大を経て、東大の本部で10年間IRもどきを国際、評価、教育面で担当し、現在は、国立情報学研究所にてオープンサイエンスの政策面に関わっており、外部からみると、脈絡ないキャリアに見えます。しかし私なりに、「現場の問題に関わりながら、それを研究として深めていく」というスタンスで、特に高等教育と学術政策に軸足を据えて、やってきたつもりです。

RIHEでは、皆さんのお力を頂きながら、理論化の側面を強化できればと思っています。同時に、大学マネジメントの現場における問題意識をフィードバックし、ささやかながらお力になればと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

2019年度学内研究員



江頭 大藏 (えがしら だいぞう)
大学院社会科学部研究科副研究科長・教授 (法学部長 法政システム専攻長)

このたびは、学内研究員としてセンターに参加できる機会を与えていただき、まことにありがとうございます。法学部および法政システム専攻は、大学・大学院における教育について、新しい課題に今ま

さに直面しています。まず、法学部にいわゆる「法曹コース」を設置し、法科大学院と合わせ5年間で完結する一貫的・統合的カリキュラムを構築して、法曹養成を促す制度が始まろうとしています。また、現在中国の西南政法大学との間で準備を進めている前期課程共同養成プログラムでは、大学1年次から専門の法律と日本語の両方を学んだ学生が入学してきます。どちらも初めての取り組みであり、教育実践の効果を検証しつつ改善を繰り返すこととなりますが、そこで得られる知見によってセンターの発展に貢献できれば幸いです。



岡 広子 (おか ひろこ)
大学院医系科学研究科附属死因究明教育研究センター 特任講師

このたびは、伝統あるセンターの学内研究員を拜命し、大変光栄に存じます。

私の専門は歯学・医学教育および法歯学で、これまで広島大学歯学部における英語を用いた専門教育や国際プログラムに関わってまいりました。また、東日本大震災での犠牲者身元確認への従事をきっかけに災害時の多職種連携教育にも取り組んでおり、医療や行政分野の高い知識・技術を持つ専門職集団の中でも間をつなぐためのコミュニケーション能力や異文化理解の必要性を常々感じています。2018年度より死因究明教育研究センターに異動となりました。この機会とこれまでの経験を国際社会における死因究明や災害犠牲者身元確認の基盤となる教育研究の発展へも繋げてまいりたいと思います。



三時眞貴子 (さんとき まきこ)
大学院教育学研究科・准教授

この度、伝統ある高等教育研究開発センターの学内研究員を務めさせていただくことになり、とても有難く思っています。専門は西洋教育史で、現在は19

世紀から20世紀初頭の浮浪児やネグレクト児等の「適切な養育を受けていない子ども」の処遇と教育について研究しています。博士論文およびそれをまとめた単著では、18世紀後半の都市文化と教育というテーマで研究を行い、とりわけ科学的知識の教育や知的活動に関心を持って取り組みました。現在もその関心自体は持ち続けており、学問や知識についてこれからも考え続けたいと思っております。どこまで高等教育研究に貢献できるかわかりませんが、どうぞよろしくお願いいたします。



鈴木 孝至 (すずき たかし)
大学院先端物質科学研究科・教授

この度は、貴センターの学内研究員を拝命し大変光栄に存じます。私は、強相関電子系及びマルチフェロイックスにおける新規物性の開拓・解明を目指す実験的物性物理学の研究を行っております。広島大学は、平成18年度に到達目標型教育プログラムを導入しました。当時の学長から導入のリーダーを命じられ、18年導入に向けた準備と導入後の初代学士課程会議議長としてプログラム運営の安定化が職務になったとき、教育にはずぶの素人の私と教育との関わりが生まれました。現在は、超伝導・超流動など特に興味深い量子現象の実験を題材にして、理学に特化したアクティブラーニングの開発も手がけております。教育の専門家からご教示頂ければ幸いです。

2018年度離任者



丸山 文裕 (まるやま ふみひろ)
2019年3月末退職

広大畏るべし

広島大学は、2023年までに世界大学ランキング100位内を到達目標にし、広くホームページでも公表しています。日本の大学でランク入りするのは、他に1校くらいなので、国内2位ということになります。明治19年の帝国大学令以来、ヒト、カネ、モノを集中投資された旧帝大を蹴散らし、私学の雄を差し置く快挙といえます。国立大学は中期目標計画を文科大臣から提示され、どこも勘違いのない無難な目標を掲げます。広大的ようにミッション・インポジブルに、遮二無二挑戦することは大学の鏡でしょう。当センターも広大的のこの中期目標達成に、なりふり構わず貢献することが期待されています。広大を離れて、朗報が届くのを楽しみにしています。



Thomas David Brotherhood
(トーマス・ブラザーフット)
(2018年1月～2019年1月まで滞在)
オックスフォード大学グローバル高等教育センター大学院課程後期

My name is Thomas Brotherhood, a doctoral researcher at the Centre for Global Higher Education, University of Oxford. I was lucky to spend a year at RIHE in 2018

under the kind supervision of Professor Huang. Thanks to the generous support of all of the staff and students that made me feel so welcome, I was able to collect a large amount of data for my doctoral thesis and begin broader collaborative projects. Further, I greatly developed my understanding of Japanese higher education. On this foundation I hope to continue to work with colleagues at RIHE and across Japan and make a lasting contribution to the field of higher education studies.

修了生



川村 和弘 (かわむら かずひろ)
博士課程前期修了 (2019年3月)

初めて広島大学高等教育研究開発センター (RIHE) を訪れた2012年、自分が大学院生となる日が来るとは、まったく予想していませんでした。はじめは担当業務であった職員採用や研修といったテーマを入口に、やがて地域社会との関係を中心とした公立大学の研究を行うようになりました。国内随一の研究業績を有するRIHEのリソースを十分に活用できた2年間とは言えませんが、とても恵まれた環境で高等教育研究について学ぶことができました。引き続き毎日が研究ネタの宝庫である職場での組織エスノグラフィーなどを通じて、大学研究を続けていく予定です。いつかRIHEの発展に寄与できる研究発表を行えるよう、日々精進していきます。RIHEの皆様、ありがとうございました。



任 夢圓 (にん むえん)
博士課程前期修了 (2019年3月)

いろいろお世話になりました。この度、博士課程前期を無事に修了できて、非常にうれしく思います。RIHEの皆様のおかげで、充実した生活を送ることができて、心より感謝いたします。

最初に広島大学に入った時、不安でしたが、授業でも生活の面でも、先生方はいつも親切に対応していただき、楽しく生活できました。誠にありがとうございました。

一方、研究に関しても、授業から学んだ知識、研究方法を活用して、アンケート調査を実施し、卒業論文を執筆することを通して、研究に対する理解を深めることができました。

これから、中国に帰ってから、就活が始まります。頑張っていきたいと思います。

最後に、指導教員の大膳先生を含めたセンター教員のご指導と職員皆様のご支援に、お礼を申し上げます。



李 涵龍 (り かんりゅう)
博士課程前期修了 (2019年3月)

修士課程の二年間はあっという間に過ぎました。主指導の大膳先生をはじめ、副指導の先生である藤村先生、村澤先生、および諸先生方、同じRIHEで過ごしてきた院生の皆さんご指導とお支え、誠にありがとうございました。

私は大学では数学専攻で、日本語は独学で勉強してきたので、最初日本に来たとき、研究能力も低く、自信が持たなくて、なかなか慣れませんでしたが、しかし、大膳先生や先輩方から優しく教えてもらい、ようやく院生として無事に進学し、卒業まで頑張ってきました。研究テーマは「中国の双一流大学の募集政策」についてですが、日本の研究はとても参考になりました。そして残念ながら、博士進学は諦めましたが、修士修了の後で、続けて日本に残って就職活動を行うことにしました。この二年間、RIHEで勉強してきた知識と経験を活かして活躍できるように頑張りたいと思います。

新入生



川田 晃生(かわだ こうせい)
博士課程前期入学 (2019年4月)

2019年4月より高等教育学専攻博士課程前期に入学しました川田 晃生(かわだ こうせい)と申します。国立大学法人に職員として2013年4月に入職し、学務業務を経験した後、文部科学省高等教育局にて行政実務研修生として勤務しました。その際、大学設置や私立大学の支援に関する業務に携わり、大学とはどのように在るべきか(特に職業教育を通じた社会との接続)という疑問を抱くようになり、本専攻への進学を希望しました。最初の1年間は休職、後に復職し仕事と研究を両立しながらという予定を立てております。本専攻での学びを通して、ゆくゆくは高等教育学の知識を有した大学職員として活躍できるよう邁進して参ります。よろしくお願いたします。



簡 榮宸(かん らくしん)
博士課程前期入学 (2019年4月)
※ 研究生より進学

初めまして、2019年4月より博士課程前期に入る簡榮宸と申します。昨年10月より、私は研究生としてRIHEに入り、センターの先生方にご指導をいただき、大変勉強になりました。この半年間、色々お世話になりました。

私は大学に入って初めて日本語を一から勉強し、日本語を掌握するには長い時間をかけました。社会や教育学には正直に言えばあまり触れたことはないどころか、日本語という外国語専門すら距離を感じております。しかし、教育は社会を生活している私たちに大きな影響を持っています。中国では子どもの教育はいつも家庭の一大事として重視されています。これまで成長してきた私も教育に大いに恵まれました。教育のことをもっと知りたい故に、高等教育学専攻で高等教育に関する知識を補足しながら、教育の価値やあるべき姿を追求していくことにしました。これからも宜しくお願致します。



康 凱翔(こう がいしょう)
博士課程前期入学 (2019年4月)
※ 研究生より進学

2019年4月より博士前期課程に入学する康凱翔と申します。2018年10月から半年間の研究生生活を送り、充実した日々はとても楽しくて印象的でした。センターの先生方、先輩の方々からいろいろ助言をもらえて、大変お世話になりました。ゼロから高等教育に関する知識を少しずつ積み上げてきて、多様な視点から高等教育を見ることができて、とても面白かったと思います。これからは自分の研究関心をしっかり追求して、自分なりの観点を持ち合わせることを期待しています。これからも、どうぞよろしくお願いたします。



陳 心鈺(ちん しんぎょく)
博士課程前期入学 (2019年4月)

2019年4月より博士前期課程に入学した陳心鈺と申します。日本の大学院に進学するため、2017年10月に来日し、福岡にある日本語学校で勉強して、一年半が経ちました。この一年半、自分で教育学に関する専門知識を勉強しながら、自分に合う大学院

と先生を探しました。今年大学院生の一員として、RIHEでの学習および研究の貴重な機会を得られたことに、心から感謝いたします。

現在は不本意入学に関心があり、その形成要因や不本意入学者の生活・学習現状や進路支援などの関連研究に深く進みたいと思います。RIHEにはたくさんの専門書があり、充実した教育研究環境が備わっています。これから、この素晴らしい環境で、先生たちのご指導を受けながら、一生懸命頑張りたいと思います。今後、諸先生方、先輩の方々、どうぞよろしくお願い致します。



中本 陵介(なかもと りょうすけ)
博士課程前期入学 (2019年4月)

2019年度から広島大学教育学研究科でお世話になります中本陵介です。大阪府出身で、学部時代は外国語学部に所属し、スペイン語を学んでいました。今でも海外旅行が好きで、年に1、2回は海外に行きます。現在、京都にある私立大学の事務職員として勤務しており、8年目を迎えました。これまで大学生の修学支援、中退予防、留学支援などの業務に関わってきましたが、大学生の修学行動の分析、心理統計についてより深く学びたいと思い、大学院の門戸をたたきました。皆様にはご迷惑をおかけすることも多々あるかと思いますが、先生方、先輩や同級生のみなさん、事務室の皆様どうぞよろしくお願いいたします。



橋本 あや(はしもと あや)
博士課程前期入学 (2019年4月)

この度、博士課程前期に入学しました橋本と申します。公立大学に勤務する大学職員です。これまで、職員研修として、学生寮について調査したことをまとめたり、自校職員の能力開発に関する課題について考察したりしてきましたが、自己流でそれらを行う中で自身の能力不足を痛感し、高等教育について学び、探求したいと思ったことが入学の動機となりました。今までは職場でしかなかった大学が、今後は研究の対象にもなるわけですが、視点が変わることで何が見えてくるのだろうかと思うとワクワクします。業務と学業の両立は簡単なものではないと思いますが、修了めざして一步步進んでいきたいと考えています。どうぞよろしく申し上げます。



方 可(ほう か)
博士課程前期入学 (2019年4月)
※ 研究生より進学

こんにちは。2019年4月より博士課程前期に入学した方可と申します。2018年10月に、研究生としてRIHEへ入学させていただいて、半年が経ちました。このセンターに研究生として来てからの半年間、佐藤先生をはじめ諸先生方には大変お世話になりました。誠にありがとうございます。また、研究生の生活がとても充実しており、これから院生としての学生生活がとても楽しみです。まだまだ高等教育に関する知識が不足しているので、これからしっかりと勉強していきたいと思っております。

私は来華アフリカ留学生と地元学生の対立関係について関心を持っております。今第三諸国と様々な連携と協力を求める中国ではアフリカに対して親切と友善な雰囲気を持つはずなのに、アフリカ人について言及している限り、負の印象に繋がりがやすいです。この先も佐藤先生の指導で、地元大学生のナショナリズム意識の観点から、中国人学生とアフリカ系留学生の間の対立が起きている要因について探っていきたいです。

今後ともよろしくお願いいたします。

※上記の方々以外に、2019年4月は、砂田 寛雅さん、堀内 喜代美さん、陳 麗蘭さんが博士課程後期に入学されました(前期課程より進学のため省略)。

情報調査室だより

センターの出版物類は下記サイトで閲覧可能です。

是非、ご活用ください。



日本語サイト <https://rihe.hiroshima-u.ac.jp/publications/>

英語サイト <https://rihe.hiroshima-u.ac.jp/publications/en/>

* 書名・著者名での検索は、下記『文献情報総合検索』システムをご利用ください。

文献情報総合検索



文献情報総合検索

<https://rihe.hiroshima-u.ac.jp/search/>

ご希望の資料のPDFが掲載されていない場合は、下記までお問い合わせください。

広島大学 高等教育研究開発センター 情報調査室
電話(直通)082-424-6239
メール(代表)k-kokyo@office.hiroshima-u.ac.jp